
仮面ライダーオーズ 街を守る王の戦士

雪羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーオーズ 街を守る王の戦士

【Nコード】

N3169Y

【作者名】

雪羅

【あらすじ】

この作品は仮面ライダーオーズとなつて戦う少年の物語です。コラボ、要望はなるべく受け付けます。更新は不定期ですが一ヶ月に2話くらいは必ず更新します。初めての作品ですので至らぬ部分もあります。暖かく見守ってください。12/2ベルトさん作「仮面ライダーエターナル」風都を守る永遠の戦士」の進也君と里美ちゃんが登場します。

第01話「出会い」（前書き）

最初は簡単な出会いとかです。じゅっくりと。

第01話「出会い」

ここは日本の京都。春の訪れた京都は桜が満開でとても美しい。

【如月家】

「何！？本当ですか母さん」

そう言った少女、如月志野は携帯電話で母親と通話していた。

「本当よ。昔の友達の息子さん。ご両親を亡くしているからうちに居候さ」

せることにしたのよ」

「名前は何？」

電話の奥で母親の笑い声が聞こえた。

「神代達也君。志野にお似合いの男の子よ」

「な、何を言ってるんですか母さん！！！！」

その言葉に僅かに頬を赤くして声を荒げた。

【京都駅】

「それじゃあ行くわよ達也君」

「はい、これからよろしくお願いします」

礼儀正しく挨拶をした少年、神代達也はこれから住むことになる如月家へ向かう。

【如月家】

「さ、ここよ。これからは私を本当のお母さんと思ってくれているから

ね」

「ありがとうございます」

家の玄関の扉を開き、家の中へと入った。純和風の家は、落ち着いた
きのあ

る雰囲気を感じ出しており、これから住むには最適な場所だ。

「あ…」

キッチンのあるリビングは畳に座布団と本当に和で統一してある。

「お前が神代達也か」

「あ、ああ」

その少女は如月志野。髪は黒のポニーテールで纏めてあり、顔立

ちも相

まって鋭さが溢れている。可愛いより綺麗、のほづが褒め言葉としては似

合う。

「私は如月志野だ。これからよろしく頼む」

「俺は神代達也。これからよろしく」

「もう志野、そんな怖い顔しないで嬉しいなら我慢しなくても良いのよ」

その言葉に対し志野は。

「我慢していません。この顔は産まれたときからです」

「達也君、私の自己紹介がまだだったわね。如月欄香。改めてよろしくね」

「はい、よろしくお願いします」

この如月家での生活が始まった。欄香は一人小声で呟いた。

「この街も守ってくれるかしら」

「仮面ライダーオーズ」

第01話「出会い」（後書き）

次は達也が戦います。戦闘描写はあまり得意ではありません。

登場人物設定（前書き）

登場人物一覧です。投稿時点でまだ登場してないキャラがいますが、「こんなキャラもいるんだな。」位の認識をお願いします。1 / 13 ネタバレ若干ありますので嫌な方は気をつけて。

登場人物設定

登場人物設定

神代達也 かみしろ たつや

風都学園高等部新1年生

体重 59?

身長 171?

髪型 黒い短髪

一人称 俺

本作品主人公。中学三年の時に両親を事故で亡くす。両親の知り合いの如月欄香（下記）の家に居候することになる。仮面ライダーオーズに変身できるが理由は不明。

普段は怒ることの無い優しい性格だが大切な人などを貶された時は怒りが露わになる。

見た目はISインフィニットストラトスの織斑一夏。みんなに優しい美少年。声のイメージは当然一夏役の内山さん。

如月志野 きづひの

京都鳳凰学園高等部新1年生

体重 教えるわけないだろうが馬鹿者！

身長 163cm

髪型 黒髪でポニーテールを二つに分けた感じ

一人称 私

生まれつき家事は万能。父親は剣道の有名な流派の継承者。東京にて道場を開いている。親の影響で剣道を嗜んでいる。

自らの発育の良すぎる体（特に胸）に若干の悩みを持っている。しかし、それで達也の気を引けるなら、とも思っている。第09話でファンガイアの王の血を受け継いでいることが発覚。仮面

ライダーキバになる。

見た目はISインフィニットストラトスの篠ノ之箒。かなり強気な性格な美少女。声のイメージは箒役の日笠さん。

たつかわ
龍川信司

京都鳳凰学園高等部1年生

体重 60kg

身長 168cm

第04話から登場。達也に次ぐ第2の仮面ライダー。仮面ライダー龍騎に変身する。原作と違い、鏡が無くても変身可能、契約モンスター絡みの厄介事も無い。達也達が通う京都鳳凰学園高等部に転入してきた。達也とはうまく意気投合しており、今後に期待が持てる。

見た目は機動戦士ガンダムOO1stの刹那・F・セイエイ。明るくて楽しい。声のイメージは刹那役の宮野さん。

きさらぎ らんか
如月欄香

志野の母親。夫は東京で剣道の師範を務めているため、現在は志野と二人暮らし。志野の成長を見守りながら、日々穏やかに過ごしている。

見た目は機動戦士ガンダムOO2ndのスメラギ・李・ノリエガ。

しのはら あや
篠原綾

第03話より登場。京都鳳凰学園高等部1年生。達也達と意気投合し、いつも会話している。転入してきた信司の事を何かと気にかけており、恐らく好意を持っていると思われる。一人称は僕。

見た目はISインフィニットストラトスの更識盾無。性格等は同
作品のシャルロット・デュノア。素直で男心を打ち抜く狙撃者^{スナイパー}（笑）
。声のイメージはシャルロット役の花澤さん。

登場人物設定（後書き）

次から戦います。

第02話「始まる戦い」(前書き)

いよいよ達也が戦います。所有メダルは次話から話しの冒頭に掲載します。

第02話「始まる戦い」

「志野、準備はできた？」

「ああ、万事OKだ。」

「如月さん、行こう。」

「二人とも、気をつけるのよ」

達也、志野「行ってきまーす」

二人は京都鳳凰学園高等部の入学式に向かっていった。

「如月さんは何か部活をする予定はあるの？」

「剣道部があれば入部するつもりでいる」

「剣道、得意なの？」

「父親の影響でな。いま父親は東京で道場を開いている」

そんな話を話している内に学園についた。受付にて、

「ご入学おめでとございます。お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「神代達也です」

「如月志野です」

名前を伝え、所属クラスを教えてもらい、リボンを制服の胸に付けられた。

二人は同じ1年D組の生徒になった。クラスには、他の生徒がいた。

「みんな席に着いてー。」

担任の先生と思わしき人が入ってきた。若い女の先生だった。

「私が今日から皆さんの担任になりました、若月早苗です。一年間よろしくね」

若月先生が自己紹介を終えると、

「それでは、入学式が始まりますので、皆さん出席番号順に並んでください」

場所は変わって入学式会場。いろいろなんかやった後に、この理事長の挨拶が始まった。

「新入生の皆さん、入学おめでとう！そしてここ京都鳳凰学園高等部にようこそ！この学園の生徒という新しい君たちの誕生だ！！ハッピーバースデー！！！！！！」

延々と理事長の祝辞が続き、ようやく入学式が終わった。

場所は再び1年D組。

「それでは、皆さんに自己紹介をしてもらいます。では、出席番号1番…」

突如校庭から爆音が響いた。何かが激突した。

「み、み、み、み、皆さん落ち着いて…」

先生が一番落ち着いていなかった。やるしかないのかよ…。

「ちよっ、君!？」

教室を飛び出して俺は爆心地に走っていった…。

「おうおう、こんなめでたい日に来るやつがいるのかよ。ったく、入学早々これかよ」

オースドライバーを腰にかざし、自動的にベルトと共に腰に装着される。手には3枚のコアメダルが

あった。3枚をドライバーに装填し、右腰のオースキャナーでメダルの装填部分をスキャンする。

「変身!」

『タカ、トラ、バッタ! タトバ、タトバ タトバ!』

達也は仮面ライダーオースタトバコンボに変身した。

「神代…？」

志野は目の前の出来事に啞然としていた。

「貴様、何者だ？」

煙の晴れない爆心地からその声は聞こえてきた。達也は手首を捻りながら、

「オーズ。仮面ライダーオーズ」

爆風の中から、一体の怪物が姿を現した。見た目はライオンみただ。

「さしずめライオンヤミーって所か。行くぜ」

オーズは腕のトラクローを展開させ、ライオンヤミーに斬りかかった。敵も爪で応戦してきた。しか

し、こちらの方がリーチが長いので、トラクローが一方向的に当たった。

「うおおおおおおお！」

ライオンヤミーは頭から強烈な熱光線をオーズに向けて発射した。

「熱ちちちちち、やってらんないよ全く！」

オーズはメダルを三枚全部取り替えて、セットしてスキャンした。

『サイ、ゴリラ、ゾウ！サゴーズ！サゴーズオ！』

オーズはサゴーズコンボへコンボチェンジをした。

「これでも喰らえ！」

オーズは腕のゴリバゴーンを、相手に向けて発射した。

「うがああああああ！」

見事に命中した。

「とどめだ！」

オースキャナーで再びメダルをスキャンした。

『スキャニングチャージ！』

オーズは両足をくつつけてジャンプし、そのまま降りて、地面に着地した。するとライオンヤミーは

身動きがとれずにオーズの方へ引き寄せられていく。

「せいやあああああ！」

エネルギーの蓄積されたゴリバゴーンで両側からライオンヤミーは叩き潰され、大量のセルメダルと

なつて爆散した。

「ふう、おしまいっ」と

他の生徒達は達也をみて、

「凄いな、あんな化け物を倒すなんて…」

「神代…、お前は一体…」

【???】

「カザリ、お前のヤミー、あっけなく倒されたじゃないか」

「しかたないでしょ。あのオースが相手だったから」

「ま、次は負ける気はしないけど」

「あいにくだが、次は俺と俺のヤミーの出番だ」

「ほう。その実力、みせてもらおうか。アंक」

「望むところだ、ウヴァ」

【如月家】

「神代、お前は…」

「隠しててゴメン。俺は仮面ライダーオースなんだ」

そういつて達也は志野の部屋を後にした。

残された志野は…。

「なんだ、この気持ち…。あいつの事が、頭から離れない…」

「ズバリ、恋よ」

「母さん!？」

欄香がゆつくりと部屋に入ってきた。

「志野、貴方は、達也君に恋をしたのよ…」

「……………//」

「まあ、そう恥ずかしがる事じゃないわよ。志野の年頃ならおかしくない。応援したげるから頑張って

ね」

「ありがとう…//」

志野は頬を赤くしながらつぶやいた。

「あいつの事が…//」

物語の歯車がゆつくりと動き出した…。

第02話「始まる戦い」（後書き）

戦闘シーンって難しいですね。次話でまた会いましょう。

【次回予告】

「久しぶり達也君」

「メダル返せえ!!」

「神々しい…」

街を守れ！仮面ライダー！！

第03話「紅く煌めく不死鳥」(前書き)

第03話です。どづづ。

第03話「紅く煌めく不死鳥」

t h e m e d a l s

c o u n t s

えるメダルは…？

現在、オーズの使

タカ×1

トラ×1

バッタ×1

クワガタ

×1

ライオン×2

サイ×1

ゴリラ×1

ゾウ×1

「それでは、入学式に行えなかった自己紹介をしてもらいます」

（そういえば先生、そんなことも言ってたな…。内容決めてねーぞ。一体どうすればいい

んだ？ええつとまず…）

「はい、次は、神代君、神代達也君」

「ええつ、もう俺え！？」

志野（お前が惚けているからだ馬鹿者…。）

「えーと…、神代達也です。特技は運動全般、趣味はこれといったものはありません…。」

これから1年間よろしくお願いします」

クラス中の女子が少々頬を赤くしていた。変な事でも言ったかなあ？

「はい、神代君これからよろしくね。では次は、如月さん、よろしくお願いします」

志野は「はい」と返事をして教壇に立った。

「如月志野だ。特技は剣道、趣味は料理。同じクラスの学友としてこれから1年間よろし

く頼む」

なんだ！なんだ！クラス中の男子がにやけているぞ！か、神代、お前もかああああ！

覚悟しておけ……！！後でお前を……！！

（なんだ！なんだ！如月さんが俺をにらみつけているぞ。怖い怖い……！）

授業やら何やらで3時間後…時計は12時45分を指していた。

「そろそろ食事の時間だな。如月さん、食堂に行こ」

「もうそんな時間が、よし、行くとしよう」

ここ京都鳳凰学園高等部の食堂は食券発行機に電子生徒手帳をかざして認証をして自分

の食べたいメニューを選ぶ、というシステムだ。

「えーと、よし。これにしよう」

俺はざるうどんにした。一方志野は…。

「私はこれだな」

志野もざるうどんを選んだ。

「お、如月さんもざるうどんなんだ」

「悪いか…／＼」

（如月さん、なんで頬が赤いんだ？）

「ここにしよう。眺めもいいし」

食堂は校舎2階に設置されている。席について俺たちは食事を始めた。そこへ…。

「あれ、達也君？達也君だね。僕、覚えてる？篠原綾。小学校の時の…」

「綾！？何年ぶりだろう？ずいぶん可愛くなっただな」

「へっ！？ちよっ、達也君、何言ってるの／＼！？」

（何なんだ…彼女は…）

「あ、ごめん如月さん。紹介するよ。篠原綾。俺の小学校時代の同級生。綾、彼女は如月

志野さん。今俺が居候している家の娘さん」

「どうも。如月さん、これからよろしくね。私は篠原綾。綾って呼んでくれればいいから」

「こちらこそ。私は如月志野。志野とでも呼んでくれ」

（良かった、二人とも仲良くなったみたいだ）

二人から三人になった俺たちは色々話しながら食事を終えた。

P M 3 : 3 0

「それでは皆さん、明日から本格的に授業が始まりますので忘れ物の無い用にしてくださ

いねー」

学園生活二日目が終わり、如月さん、綾、俺の三人で下校することにした。

「じゃあ、僕の家こっちだから。また明日ね」

「じゃあなー」

そう別れの挨拶を告げて綾は家の方へ歩いていった。分かれてか

ら数十秒後、

「キヤアアアアアアアアアア！」

「神代！今の悲鳴！」

「ああ、綾だ！」

綾は目の前に猛禽類の姿をしている怪物と、孔雀の怪物に遭遇していた。

「おいお前！オーズはどこだ！」

「し、し、知らないよ！」

綾は怯えながらも必死に答える。しかし…。

「嘘をつくんじゃないやねえ！」

相手は信用してくれなかった。今にも襲いかかろうとしたその時、

「おい、お前！綾に何してやがる！」

達也が駆けつけた。達也の方に駆け寄る綾。

「来たな、オーズ。俺はアंक。メダル、返してもらうぞ」

「何だか知らないけど、俺目当てって事だな。変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タトバッ、タトバタ

トバ！』

「如月さん、綾を安全な所に！」

「了解した！」

敵のアンク、クジャクヤミーは、オーズに火炎弾を発射した。

「ウワツ！危ねえな！」

オーズはアンクの懷に突っ込んでトラクローをアンクの土手っ腹に突き立てた。タカへ

ツドの眼が赤く光り、タカの鳴き声が轟いた。

「グアツ！き、貴様あ！ガツ！」

オーズはアンクの体から二枚のメダルを抜き取った。

（これは、クジャクと、コンドルかな？）

「クソツ、相手がガキだと思って油断した！ヤミー！取り返せ！」

「遅い！」

『タカ、クジャク、コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜！』

オーズはタジャドルコンボへとコンボチェンジを完了した。その姿はまるで不死鳥の如く

紅く煌めいていた。

「ちっ、しくじったな。俺は逃げるか…」

「神々しい…」

アंकは苦しみながらも飛んで逃げていった…。

「メダル、返せ！」

クジャクヤミーは翼で攻撃を仕掛けてきた。しかし、オーズには効いていなかった。逆

にオーズのコンドルレッグのクローをもろに喰らってしまった。飛び散るセルメダル。

「終わりだ！」

オーズはスキヤナーをドライバーに滑らせた。

『スキヤニングチャージ！』

オーズは上昇してクジャクヤミーにプロミネンスドロップを喰らわせた。爆散し、セル

メダルとなって消えた。

「如月さん、大丈夫？」

「神代、私は無事だ。綾は無事に家に帰っていった」

「ふーっ、良かった」

「一つお願いがある。い、今からお互いを下の名前でよばないか？」

志野は少しもじもじしながら呟いた。

「OK。じゃ、綾も無事に家に帰っていったし、俺たちも帰ろうか。志野」

「ああ、帰るとしよう、達也！」

二人はまた一段階強い絆を手に入れた。

【???】

「アンクらしくないね。コアを二枚も奪われるなんて」

「ガキがオーズだったから油断した。次は

こそは…」

「じゃあ、次は俺がやる」

「あらあ、ガメル自分から言うなんて偉いわ」

「ゲヘヘ、ありがとうメズール」

カザリ（力と防御が取り柄のガメルか…。なんだか面白い事になりそうだね…）

【如月家】

「あら、志野、何か吹っ切れたの」

「ああ！」

欄香は嬉しそうな笑顔を浮かべる志野を優しく見つめていた。

第03話「紅く煌めく不死鳥」(後書き)

今回は登場人物設定にも掲載してある新しいライダーが登場します。

【次回予告】

「桜が綺麗だな…」

「これを受け取って欲しい…／／」

「final vent」

戦わなければ生き残れない！！

第04話「桜のもとで舞う龍」(前書き)

第二のライダーが登場します。どうぞ。

第04話「桜のもとで舞う龍」

C o n t s t h e m e d

a l s 現在、オーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 クワガタ×

1 バッタ×1

ライオン×2 トラ×1

サイ×1

ゴリラ×1

ゾウ×1

5月15日。あれから一ヶ月以上過ぎたのか…。そういえば今日は日曜日。高校も休みだ。俺は特にやることもなく、ぼけーと部屋で過ごしていた。すると…。

「おい達也君ー。ちよつと来てー」

欄香が達也を呼んだ。いったい何の用だろう？俺は欄香さんの部屋に行った。

「達也君、志野がね、貴方と一緒に外出したいと言ったの。あの子、自分で言うのは恥ずかしいから私にたのんで来たの。ま、あの子の為だから、行つてあげて。もう玄関で待っているから」

「了解です」

俺は身支度を調べ、玄関へ向かった。

玄関では志野が少々怒り気味だった。

「遅いぞ達也！女性を待たせるとは何事だ！」

「ゴメン、身支度に手間取ったから…」

「今回は許してやる。しかし、次遅れたら…覚悟しておけよ」

俺は怒っている志野に謝りながらサンダルを履いて出発した。

日曜の京都は観光客がやはり多い。まあ、歴史ある街だからな…。やっぱ京都の桜は綺麗だな…。心がなんて言うか、あーっ、なんて表現したらいいか解らん！

「おい達也、どうした？どこか調子でも悪いのか？」

志野が俺を心配してくれてたのか、俺に話しかけてきた。

「いや、桜が綺麗だな、って思ってた」

「そうか」

しばらく色々な観光スポットを周り…。

「よし、あそこの店で何か食べるとしよう」

二人は風情のある定食屋に入った。

「いらつしやいませー。お二人様ですか？」

店員が愛想良く訪ねてきた。俺達は「2名です」と伝え、店員は俺達を座敷へと案内してくれた。

「風情がある店だな」

「ああ、畳に直接座って食べるのも中々粋なもんだな。で、志野は何を注文しようと考えてるんだ？」

「私は…そうだな…、よし、この鮭の塩焼き定食にしよう」

「俺は…、この若鶏の唐揚げ定食にしよう」

志野が近くを通りかかった店員さん呼び止め、注文を始めた。
「では、ご注文を確認させて頂きます。鮭の塩焼き定食がお一つ、若鶏の唐揚げ定食がお一つ、以上でよろしいでしょうか？」

「はい」

「ではしばらくお待ちください」

6分後、二人の料理が届いた。

「では達也、食べるとしよう」

「OK」

二人「いただきます」

志野は鮭を食べた。

「良い…良い物だな…」

志野は目がキラキラしていた。俺はそんな志野と楽しく会話しながらご飯を食べた。

すっかりお腹いっぱいになった俺達は勘定を済ませに行った。

「お客様の会計2650円になります」

俺は度肝を抜かれた。なんとか財布の中に3000円あって事な

きを得たが…。

帰り道で志野が、

「達也。すまなかったな、ご馳走になって」

「別に気にしなくて良いよ。男が女の子に奢ってもらうなんて…」

「その、今回のお礼がしたいのだが…」

志野と達也は近くにあったベンチに座り、話を続けた。ベンチでの二人の間の距離は5cm

と無かった。思わず動揺する達也。

「これを受け取って欲しい…／／／」

志野の唇が達也の唇に近づいてきた。

（え！？もしかしてこれって…キス！？）

達也が慌てていると路地の奥から唸り声が聞こえてきた。思わずその方向を向く達也。

「ごめん志野、そこで待っててくれ！」

達也は走っていった。その後、志野が呟いた。

「私としたことが…なんて大胆な…／／／」

志野は自分の行いに気付き、顔を真っ赤にしていた。

達也は現場に到着した。そこでは警官がすでに拳銃で攻撃を始めていた。相手の容姿は…ゴリラ？とにかく倒すしかない！

「お巡りさん下がって！ここは俺が！」

「待て、君に何が…」

「変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タトバッ！タトバタトバ！』

タトバコンボに変身しヤミーに拳をぶつける。しかし、無に等しいほどダメージは少なかった。

「堅てえ…。ならコイツだな」

オーズは真ん中のメダルを取り替えて再度スキャンした。

『タカ・ゴリラ・バッタ！』

タカゴリラにフォームチェンジをした。ゴリラアームだからか、トラアームよりかはダメージは大きい。しかし…。

「ハッ！」

相手の一撃を直に受けてしまい、変身が解除されてしまった。

「くそぉ…」

さらにそこへ予想外のアクシデントが訪れた。

「達也！」

「馬鹿っ、志野！待ってると言っただろ！」

それを好機とみたゴリラヤミーが志野に襲いかかった。

「え…？」

あまりの事態に足が動かない志野。

「まずい、逃げる志野…！」

ヤミーの拳が志野に当たろうとした刹那、

『STRIKE VENT』

謎の機械音が響いた。突如火炎弾がヤミーを直撃した。吹っ飛ぶ

ヤミー。

「君、ここに来ちゃ危ないでしょ。ほら、下がって」

「お前は一体…？」

達也が問いかけた。

「俺の名は仮面ライダー龍騎。ま、君達の味方だ。お二人さん、下がってよ！」

そう言つと龍騎はバツクルのカードデッキと呼ばれる所から1枚のカードを取り出して左腕のドラグバイザーに装填した。

『FINAL VENT』

すると龍騎の背後から契約モンスターのドラグレッターが姿を現した。ジャンプし、ドラグレッターと共に必殺技「ドラゴンライダーキック」をゴリラヤミーに命中させた。ゴリラヤミーはセルメダル1枚を残して爆発した。

「ありがとな。おかげで彼女を守れたよ」

龍騎は変身を解除した。

「俺の名前は龍川信司。また会おうな」

そう言い残し、信司は去っていった。

翌日…。

今日は達也が風邪で休んでいる。

（一人は寂しいな…。）

なんて考えてる間に先生が教室に入ってきた。

「今日からこのクラスに新しい仲間が加わります」

教室のドアが開き、一人の男子生徒が入ってきた。

「まさか、あいつ…」

その男子生徒は口を開いた…。

「龍川信司です。今日からこのクラスに所属することになりました。みなさん、よろしくお願いします」

まさかあいつに転校生として再会するなんて私は予想してなかった。

【???】

「くそー、俺のヤミー倒されちゃったよぉ」

「まあ、予想外の乱入者が来たんだから」

「ちっ、結局俺達はコアを取られ損かよ」

少女が一人立ち上がった。

「次は私が行くわ…」

「面白い、やってみろ、メズール」

「言われなくても」

また新しい敵が迫っていた…。

第04話「桜のもとで舞う龍」（後書き）

どうでしたか？次回は前後編構成にしています。

【次回予告】

「何でお前がここにいる……」

（嘘だろ…こんな時に…！）

街を守れ、仮面ライダー！

第05話「風邪と海のコンボ」前編（前書き）

第05話です。しゅっくり。

第05話「風邪と海のコンボ」前編

C o u n t s t h e m e d a l s 現在

オーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 クワガタ×1 バッタ×

1 ライオン×2

トラ×1 チーター×1 サイ×1 ゴリラ×1 ゾ

ウ×1

「やあ昨日の…」

少年龍川信司はそうつぶやいた。

「お前、何故ここにいる…」

志野が信司に話しかけた。

「何故って…。ここに転入してきたからでしょ」

「たしかにそうだが…」

「志野、そこまで」

「綾…」

志野を止めたのは篠原綾。志野のこの学校唯一の女友達だ。

「ここにくる前に彼と知り合ったらしいけど何故ここにいてのは…？」

「む、お前が言うなら…」

「それに、志野には達也君がいるじゃない」

その言葉に志野は顔を真っ赤にする。

「ば、馬鹿者／＼／＼／＼！」

「そつえば、達也君は？」

「あ、あいつは風邪で休んでいる。」

「え、そうなの？」

「ああ、あいつ昨日散歩していたら足を滑らせて川に落っこちたらしい」

綾・信司「……………」。

唖然としていた。まさかそんな何とも間抜けな理由で風邪を拗らすなんて。

「お見舞い、行こうか？」

「いや、本人が必要無い、と言っていた。だから必要無い」

「ま、確かに愛しの志野に看病してもらった方が彼も嬉しいでしょうね」

その瞬間、綾の頭に信司の軽いデコピンがHITしていた。

「そんな事あんま言ってやんなって。志野が可哀想だろ」

綾は何故か頬が軽く赤に染まっていた。

そして下校時間。志野は一人自宅へと歩いていった。

（達也の奴、大丈夫だろうか。まあ母さんがいるから万事問題ないとは思うが…。）

志野の足が止まった。目の前にタコを模した怪物がいた。全力で逃げる志野。

（ちょ、嘘だろ！？こんな時に襲われるなんて…！）

その時、

「志野！」

風邪で寝込んでいるはずの達也がいた。

「達也！風邪は大丈夫なのか！？」

「お前が心配で見に来たらこの有様だ。下がってる。変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タトバツ！タトバタトバ！』

「うおりゃ…って視界が…！」

やはり風邪をひいてる今の達也にオーズへの変身は無理がありすぎた。瞬く間にタコヤミーにボコボコにされる。あっという間に変身が解除されてしまった。さらに…。

「やべえ、メダルが…」

ヤミーにサイとライオンのメダルを奪われてしまった。

「残りのメダルも頂くぞ…」

そこへ。

「達也、大丈夫か！？」

信司が駆けつけた。

「お前、何故俺の名前を…？」

「話は後。下がってろ」

そう言っただけを下がらせた。信司はカードデッキを構えた。すると腰にバックルが自動的に現れた。

「変身！」

本来の龍騎と同じ変身ポーズをとってカードデッキをバックルに入れた。本来ならば、龍騎達は鏡などの前でないと変身ができなかったが今作品は別だ。

「いきなり行くぜ！」

龍騎はデッキケースからカードを一枚取り出し、ドラグバイザーに入れた。

『SWORD VENT』

空からドラグレッターの尻尾を象った剣が現れ、龍騎の手に収まった。

「うりゃあ！」

龍騎の放った一撃はヤミーの体に当たる事も無かった。

「また来るぜ」

そう言い残しヤミーは去っていった。

「ゴメン達也。コア、取り返せなかったよ…」

「いいって。助けてくれただけでも有り難いよ」

「じゃ、俺は帰るよ」

「またな」

信司は走っていった。

「私たちも帰るか…」

「そうするか…ゲホッ、ゴホッ」

「無茶のしすぎだ」

【???】

「はいガメル、カザリ。貴方のコアよ」

「うわぁーありがとうメズール」

ガメルはメダルを体に吸収させた。すると何も無かった腕に重量感のある鎧みたいな物が現れた。

「やるじゃん。君のヤミー」

「まだまだ本番はこれからよ。まだ策があるから…」

その策とは一体なんなのだろうか…。

第05話「風邪と海のコンボ」前編（後書き）

次回は達也が新しいコンボを…。こっご期待。

【次回予告】

「よし、志野、どっか行こうぜ！」

「お楽しみ中悪いけど、貴方のコアを頂くわ」

『シャチ！ウナギ！タコ！』

華麗に舞え、オーズ！

第06話「風邪と海のコンボ」後編（前書き）

第06話です。しゅっくり。

第06話「風邪と海のコンボ」後編

C o u n t s t h e m e d a l s 現在オーズの
使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 クワガタ×1 バ
ッタ×1

ライオン×1 トラ×1 チーター×1 ゴリラ×1

【志野の部屋】

「くそっ… コアを2枚も盗られた…。ゴホッ…、ゲホッ…」

「大丈夫か…？ だけどメダルを全部盗られるよりはまだいい方だろ」

「たしかにそうだが」

志野と達也が話している所に欄香が入ってきた。

「はい、薬と水。これ飲んでゆっくり休みなさい」

「ありがとうございます…」

欄香はニツコリと笑顔を浮かべて部屋を出て行った。

【???】

「そろそろね…」

「君のヤミィが完全に？」

「ええ。巢の中でそろそろ…。その時は貴方達にもセルを渡すわ」

「メズール、俺にもくれるの？」

「ええ、ガメル、貴方にも沢山あげるわよ」

「わーい。ありがとうございます」

「なんか…、あの二人は800年前と何ら変わらないな…」

「ああ…。自分で言うのも何だが俺達は多少変わったのによ…」

二人のやりとりをアंक、カザリ、ウヴァは呆れた様子で見
ていた…。

二日後…。

「よしっ、風邪も治ったし、久々にどっか行こうぜ」

志野は少し困惑していた…。

（た、達也の奴、わ、私をデートに誘うつもりなのか…／＼？よ、よし！）

「い、いいだろう。その代わり、行き先は私に決めさせてくれ…」

「どこに行きたいんだ？」

「神戸に行きたい…」

「いいぜ、じゃあ準備して玄関で。」

10分後…。

「よし、行こうぜ」

「お、おう」

俺達は電車に乗って神戸まで行った。

「ここが神戸かあ…！！」

「海の風が気持ちいいな…」

志野ははしゃいでいた。ま、俺が風邪の間、ずっと看病してくれたからな。これくらいは当然かな？

「なあ志野、中華街に行かないか？」

「うん！！行こう行こう！！」

神戸中華街。色んな中華料理がそろっている。

「なあなあ、これ食べよう！！」

「お、おう…」

志野が注目した物は肉まんだった。俺は実を言うと食べたことが…。

「らっしゃい！」

店の店主が景気よく声を出した。

「志野、何個食う？」

「とりあえず10個お願いしまーす」

「あいよ！全部で1200円ね！」

俺は財布から1200円を支払った。うう…。この間定食屋で払ったから財布の中が…。（涙）

海に見える場所のベンチで俺達は座った。

「綺麗な海だなー！」

なんか志野の口調が変わっている。志野は笑顔で肉まんを頬張った。相当好きなんだな…。そんなに美味しいのか…？

「達也、一つやろう！」

「お、おう、ありがとう…」

俺は志野から肉まんを受け取り口に入れた…。

「おっ、美味い！これが肉まんか…」

「初めてなのか…。そうなら尚更美味しく感じるだろうな！」

その安らぎの空間を切り裂く声が響いた。

「お楽しみの所悪いけど、貴方のコアメダル全て頂くわ」

「だ、誰だ！？」

すると目の前の海から巨大な鯨の怪物とそれを従えてる一体の…恐らくそいつを創った奴が現れた。

「お前は？」

「初めてだったわね。私はメズール。グリードの一人よ」

「こないだのあいつもまさか…！」

「ええ。私のヤミーよ。」

「貴方のコアメダルを全て頂くわ」

「下がってる志野！変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タトバッ！タトバタトバ！』

メズールは巨大化したタコヤミーと共にオーズに襲いかかってきた。

「ちよっ、待てっ！二対一は無いだろっ！」

「お黙り」

メズールは俺に水を発射した。その勢いは凄まじかった。

「水にはコイツ！」

オーズはヘッドのコアを取り替えてスキャンした。

『ライオン・トラ・バッタ！』

ラトラバにフォームチェンジした。オーズは頭部に力を込めた。

「てや——っ!!」

ライオンヘッドから強烈な熱をもった熱光線が放たれた。

「な、何なの……!」

「今だ……!!……!!」

オーズはトラクローを展開、力の限りメズールに突き立てた。

「しまった……!!うぐっ……!!」

メズールに相当なダメージが与えられたようだ。それに伴い彼女の体からコアメダルが4枚も排出された。オーズはそれを見逃さずに奪い取った。

「く……!まさか……!」

「ああ。コイツは貰っていく」

メズールはよろけながらも海へ潜って逃げた。

「これはもしかして……!」

オーズはメダルを全て取り出し、奪ったばかりの青いコアメダルを装填し、スキャンした。

『シャチ・ウナギ・タコ! シャシャシャウタ! シャシャシャウタ!』

オーズは水棲系メダルのコンボ、シャウタコンボになった。

「よし、これなら!」

体を液化化させることができるシャウタコンボ。その力で水中に潜む巨大なタコヤミーに挑んだ。タコヤミーは墨爆弾を発射した。しかし、オーズには効かず、あっけなく打ち破られてしまった。

「今度はこっちの番だ!」

腕に備え付けられているムチを相手に絡め、水中から引つ張り出した。地面に激突し、悶え苦しむヤミー。

「さあてこいつで決めるぜ!」

オースキャナーで再びメダルをスキャンした。

『スキヤニングチャージ!!』

オーズはジャンプして上空からムチで相手を拘束して引き寄せ、タコレッグの八本足を回転させ、ドリルを作り出し、相手に突き刺

してとどめを刺すオクトバニッシュを発動した。

「セイヤアー—————！」

見事に直撃し、ヤミーの体を貫いた。セルメダルがあたりに散らばった。

「ふう、お待たせ」

「お、お見事…」

【???】

「ぐっ！うっ…」

「だ、大丈夫メズール！！」

「コ、コアを4枚も盗られたわ…」

「お、俺のコア、メズールにあげるよ…」

「ありがとう…、でもそのコアは貴方のよ。その気持ちだけで嬉しいわ…」

「おいおい、大丈夫か？」

メズールは「気にしないで」と言い残し人間態に戻り、ベッドに横になった。

「次は俺だな…」

ウヴァが不適に笑みを浮かべた…。

第06話「風邪と海のコンボ」後編（後書き）

次は達也の体にあれが…。

【次回予告】

「ば、馬鹿者…／／」

「ぐっ…何だ…？」

「そいつの体で何かが起こってるのかもな…」

街を守れ、仮面ライダー！

第07話「知られざるメダルとコンボ」前編（前書き）

第07話です。もう少しで一段落つきます。応援よろしくお願いします。

第07話「知られざるメダルとコンボ」前編

【????】

「ねえ、このメダルなあに？」

ガメルが興味深そうに見つめる。

「これは800年前には使われなかったメダルです」

そう言つて黒服の男性は10枚の紫のコアメダルから1枚を抜き取つた。その瞬間男性が抜き取つたコアと別の4枚のメダルがどこかへと飛んでいった。残つた5枚はその男性の体の中に入り込んだ。「本当に良かったの？自分がグリードになるって」

「終わりを迎える事でこの世界を完結させる私の理想の為です」

「ま、気をつけなよ。Dr真木」

counts the medals 現在オーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 コンドル×1 クワガタ×1 バッタ

×1 ライオン×1

トラ×1 チーター×1 ゴリラ×1 シャチ×1 ウナギ

×1 タコ×2

6月上旬は梅雨入りの時期。達也達の暮らす京都にも梅雨が訪れた…。

「あづい~~~~~~~~」

「達也…、黙つてろ…。余計に暑い…」

京都は気温32度を計測していた。二人は部屋で扇風機の風邪を浴びながら会話していた。

「志野、達也君、買い物に行つてきて」

二人は欄香に頼まれるがままに買い物に行った。

「全く、何でこんな暑苦しい日に買い物なんだ…」

「しょーがねーじゃん。だって欄香さんの体調を考えたら俺達が行

くべきだろ。それに志野と一緒に外出できたんだから俺は嬉しいよ」
志野の顔がボツと紅くなった。

「ば、馬鹿者：／／／」

こんな時の志野はとても可愛い。

「と、とにかく行くぞ…」

二人はマーケットへと足を急いだ。しかし…。

「見つけたぞ。貴様のコアメダル、貰うぞ」

「な！？」

目の前にはクワガタの怪物とそれを創った怪物が立っていた。

「俺はウヴァ。俺のコアメダル、返して貰う」

「志野、下がってろ」

「変身！」

「タカ・トラ・バッタ！タトバッ！タトバタトバ

！」

クワガタヤミーとウヴァはオーズに飛びかかった。それを予測していたのか、簡単にかわし、メダルをチェンジした。

「タカ・クジャク・コンドル！タ〜ジャ〜ドル

〜！」

タジヤドルコンボにコンボチェンジをした。翼を展開させ、空へと舞い上がった。

「くそつ、あれになられては困る！」

「遅いつ！」

ウヴァは逃げようとしたが、オーズの放った火炎弾を背後から受けた。そのダメージで体内のコアメダル2枚が排出された。それを拾っていく。

「おっし儲けた！」

「く、くそっ…」

その時。紫のコアメダル5枚が飛来し、オーズの体内に入り込んだ。

「ぐっ、な、なんだ…!? まあいい。トドメだ!」

オーズは胸部に腕をかざし、タジャスピナーを出現させた。蓋を開いて中にドライバーのメダルと合わせて7枚を装填し、オースキヤナーでスキャンした。

『タカ・クジャク・コンドル・ギン・ギン・ギン! ギガスキャン!』

オーズは炎の翼で高く舞い上がりタジャスピナーを前方に構えて上空から両者に向かってマグナブレイズを放った。

「セイヤアーーーーー!!!!!!」

ウヴァは避けたがクワガタヤミーは避けれずに直撃を喰らって爆散した。

「仕留め…ぐっ!」

オーズは倒れてしまった。スピナーの一部とメダルホルダーのメダルを何枚かをウヴァに奪われてしまった。

「あ……。た、達也…」

「そいつの命は無事だ。だが、何かが起こってるのかもな…」

【???】

「ほら、カザリ、アंक。お前達のコアだ」

「ふっ、世話になった」

「紫のメダル、オーズの中に入ったようだ」

Dr真木は呟いた。

「まさかオーズに渡るとは、かなり厄介な事態になりました」

「確かに。それは厄介な事ね」

「ああ。しかしDr。お前も同じ事じゃないのか」

「いえ。オーズは変身に使われると厄介。私とは違います」

【如月家】

「達也! 大丈夫か!？」

「し、志野…」

「良かった…」

達也は志野の部屋で横になっていた。

「あのメダルは一体…」

その時、達也の眼が紫に光った。

「達也、どうかしたのか？」

「いや、何故か、いや、ヤミーの気配が…」

「まさか…。しかし」

TVの電源を入れた。そこで放送されていたニュースの内容に俺達は驚きを隠せなかった。

「たった今入ったニュースです！現在二条城にて恐竜の化け物が暴れているとの事です！現在京都府警が全力で排除運動を行っています！ですが効果は全くなく、付近の住民への被害が心配されています。」

「まさか…」

「本当に…」

二人「当たるなんて…」

達也の体内に入ったコアメダル。これを軸に物語が新たな局面に動き出そうとしていた…。

第07話「知られざるメダルとコンボ」前編（後書き）

ついにDr真木登場です。最初からみんなと仲間です。次回はいよいよ最強のあいつが…。こっご期待。

【次回予告】

「解っている!!」

「うあああああ!!」

『プテラ・トリケラ・ティラノ!! プトティラーノザウルス!!』

破壊者を守護者に変えろ、オーズ!!

第08話「知られざるメダルとコンボ」後編（前書き）

これでグリード編 part1は終了です。次回からは少し落ち着き、新しいライダーになったり力を入れたり、戦力増強みたいな展開です。

第08話「知られざるメダルとコンボ」後編

C o u n t s t h e m e d a l s 現在、オ

ーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 バッタ×1 トラ×1 ゴリラ
×1 シャチ×1

ウナギ×1 タコ×2 プテラ×2 トリケラ×1 テイラノ×2

「急ぐぞ二人とも！」

達也、信司「解っている！」

俺達は怪物が出現した二条城へ急いだ。二条城は京都の代表的な歴史建築物のひとつであり、破壊なんて事になったら大変だ。

俺達は二条城へと着いた。そこには雌雄のプテラノドンを模したヤミーがいた。

二人「変身！」

『タカ・トラ・バッタ！タトバツ！タトバタトバ！』

達也はタトバコンボ、信司は龍騎に変身した。それぞれヤミーに攻撃を開始した。龍騎は善戦しているが、オーズの方は手も足もない状況だ。

「達也！」

龍騎はカードデッキからカードを一枚取り出し、ドラグバイザーに挿入した。

『M E D A L V E N T 』

龍騎の前に巨大なコアメダルが出現した。それ3枚を手に取りヤミーに投げつけた。

「それと！」

メダルはヤミーの体を切り裂いた。こちらは順調だったが…。
「うあああああっ！」

達也は変身が解除された。側のベンチに後ずさりする達也。ヤミ

ーが光弾を達也に向けて発射した。もう手遅れかと思ったその時。
「!？」

達也の体からコアメダルが三枚現れ光弾を弾いた。その後綺麗にドライバーに収まるメダル。恐竜の鳴き声と共に眼が紫に光る達也。オースキャナーは自動でメダルをスキャンした。

『プテラ・トリケラ・ティラノ! プトティラノザウルス!』

「ウオオオオオオオオオオオツ!」

プテラノドンを模した頭。肩にはトリケラトプスの角。足はティラノサウルス。全ての生物の頂点に君臨する恐竜のコンボ。その力は強大だった。一吠えで辺り一帯を凍らせてしまった。

「コノチカラハドウルイ?」

「ドウルイニシテ、テキ!」

ヤミーは空へと飛び、そこから攻撃をする様だ。オーズもプテラヘッドの力で上昇、ティラノレグのテイルバンダーでヤミーを叩き落とした。地面に降り立ち、オースキャナーでメダルをスキャンした。

『スキャニングチャージ!』

オーズの眼が光り、肩の角がヤミーの体を捕らえた。ヘッドのウイングで冷気をぶつけ、凍り付けにしてテイルバンダーでヤミーの体を碎いた。セルメダルが一枚残り、オーズの手に収まった。オーズはもう片方の手を地面に突っ込み、メダガブリューと呼ばれる武器を取り出し、セルメダルを入れて恐竜の口を閉じきつてバズーカモードに変形させた。『プットティラーノヒツサーツ!』

バズーカの引き金を引き、恐竜の咆哮と共に強力な光線が発射された。ヤミーは跡形もなく吹き飛び、セルメダル一枚となって消えた。

「ぐっ、あつ...!」

変身が解除され、メダルは体内へと戻った。達也はその場に倒れ

込んだ。それを介抱する志野。

「達也、しっかりしろ…！」

「うるせえ…、少し寝かせてくれ…」

「あ、ああ」

達也はすやすやと眠りについた。その寝顔を見つめる志野。信司は場の空気を察したのか、その場から去っていた。

「達也、一人でガンバるんじゃないぞ」

志野は達也の額に軽くキスをした。そして深紅に染まる顔を隠すように二条城を眺めた。

【???】

「あのコンボ、見たこと無いな」

「ああ、恐竜なんて僕たちの力は及ばないしね」

「倒すとすれば、完全復活…」

「その手段しかありませんね」

「今最も完全復活に近いのは僕とウヴァだね」

「ああ、今度は全員で行くか？」

「いえ、迂闊な行動は危険です。しばらくは息を潜めましょう」

第08話「知られざるメダルとコンボ」後編（後書き）

今回は志野に大きな変化が…！

【次回予告】

（嬉しさいっぱいだな！）

「私を置いていくな…！！」

「キバって行くぜ…！！」

運命^{さだめ}の鎖を解き放て…！！

第09話「打ち破れ、運命(さだめ)の鎖!」(前書き)

タイトルから推察できるようにあのライダーが登場します。

第09話「打ち破れ、運命（さだめ）の鎖！」

counts the medals 現在、オ

ーズの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 バッタ×1 トラ×1 ゴリラ×1

シャチ×1

ウナギ×1 タコ×2 プテラ×2 トリケラ×1 テイラノ×2

今日は学校にて1年全体の校外研修に出掛けた。内容は奈良の観光。

バスの中はみんなあれこれ話をしていた。現地まで一時間くらいで到着するので会話の弾みが半端無く良かった。その中で志野は一人にやけていた。

（達也の横が私、うん！嬉しさいっぱいだな！）

「志野、何笑ってんだ？」

「あ、いや、その…ノノノ」

どうしたんだ？赤い顔をして…。なんか、可愛い…。

「つきましたよ」

法隆寺に到着した。にしても、綺麗だな…。

「今は10時です。11時半までにはここに帰ってきてくださいね！」

各自自由行動となった。俺と志野で行動することにした。

「法隆寺…。世界最古の木造建築…。すごい…」

みんなあまりの素晴らしさに啞然^{あぜん}としていた。

涼しげな風が吹く。それを受けて志野の髪が靡^{なび}く。それを見た達

也はその美しさに心を奪われる。

「達也」

「はいっ!？」

思わず声が裏返った。―何やってんだか…。

「私も戦う！」

「馬鹿言つな！今のお前には何もできない！だから離れて…」

「馬鹿野郎！！私をいつもそうやって遠ざけて！私だって見守る事くらいはできた！」

「志野…」

「だから…」

「私を置いてくな！！！！！」

「お前、戦う気はあるのか？」

「ああ、無論あるって…誰だ？」

「おれはキバットバット？世。なるほど、お前が皇の血を受け継ぐ奴か。よし、俺様の力を使いな！」

志野が超えの聞こえた方を向くと変なコウモリもどきが飛んでいた。

「なんかへんなコウモリだが…ま、いい。この際なりふり構ってられない」

志野は一呼吸置く。

「キバット！！」

「おつしゃあ、キバって行くぜ！ガブツ！」

キバットバット？世が志野の左手の甲に噛みつく。志野の体に魔皇力が注がれていき、顔にステンドグラスの様な模様が現れ、腰に止まり木の様なベルトが出現した。

「変身」

キバットがそこに装着され、仮面ライダーキバの基本形態であるキバフォームへの変身が完了した。

「志野…！？」

「達也、これから、私も戦う！」

また一人、仮面ライダーという名の戦士が誕生した。
いままで達也の戦いを陰から見守ってきた如月志野。今はどうだろう。前と変わらない？否。今、彼女は果敢に立ち向かっている。
仮面ライダーキバとして。

「はぁあっ！」

華麗な蹴りであいてを圧倒するキバ。相手は腕のクローでキバを斬りつける。

「おい、お前名前はなんていうんだ？」

キバットが話しかけてきた

「志野。如月志野」

「おっし志野、腰にある青いそいつを俺の口に付けてくれ！」

志野は腰にあった青いフェッスルをキバットバット？世の口に付けた。

「ガルルセイバー！」

狼の雄叫びと共にキバの体にガルルと呼ばれるモンスターが入り込んだ。するとキバの眼が黄色から青へと変わり、体の形状も変化した、右手にはガルルセイバーが握られていた。「うるおっ！」

志野の口調も野性的に変わった。その手に握られた剣で相手を切り裂いた。その後、キバの体からガルルが出て行った。

「よし、トドメだ！」

キバは腰の一つのフェッスルをキバットバット？世の口に付けた。
「ウェイクアアップ！」

キバの右足に赤いコウモリの羽が現れ、周りが月夜に変化した。
そしてジャンプしたキバはその足で相手の土手っ腹に蹴りを喰らわせた。

「キエエエ……！！！」

相手は爆発し、ステンドグラスの欠片となって散った。

「やーっぱりこいつはファンガイアだったな」

「ファンガイア？」

「ああ、近頃人間に化けて人間のライフエナジーを奪ってる。まあ生命力を吸い取ってる様な物だな」

志野は変身を解除し達也の元へ駆け寄った。

「志野、凄いな…」

「なんか今になって震えが…」

志野は体が震えていた。

「すまない、女の子に戦わせる事になるなんて…」

「いいって。これでもお前を助けられるしな」

そして帰りのバスの中。志野はすやすやと寝息を立てていた。その寝顔を見守る達也。

（やつべええ！すげえ可愛い！ドキドキするな…。）

「ん…、なんだ…、お前か…。むにゃ…」

志野が起きた。まだ若干寝ぼけていた。

「どうした？何か私の顔についてるのか…？」

「いや、お前の寝顔があまりにも可愛いもんで…。つい携帯の待ち受けにしちまった」

志野の顔が見る見る内に唐辛子の様に真っ赤になった。

「そ、そんな物を、お、お前…。あ、お前だからその…、許してやらんことも…／＼／」

「へ？何か言ったか？」

「な。何でもない！！」

二人の会話は平和そのものだった。この先に起こる事を知らず。ただ平和だった。

第09話「打ち破れ、運命（さだめ）の鎖！」（後書き）

次から日常の割合が増えます。期待してください。
次回は…！？

【次回予告】

（僕の馬鹿馬鹿！！）

（て、天使だ…。可愛い…／／／）

「僕はね…」

「生き残ってみせる！！」

『サバイブ
SURVIVE』

戦わなければ生き残れない！！

第10話「生き残るための力」(前書き)

第10話です。今回は信司と綾にスポットが当てられています。

第10話「生き残るための力」

何も無い平和な今日。^{こんにち}信司は暇そうに外を散歩していた。

「暇だな……。……そうだ」

信司は暇をつぶせるいい考えが浮かんだらしい。

「ここか……」

その家の標識には「篠原」と書かれていた。そう。ここは綾の家。信司は緊張する心臓を押さえながらもインターホンを押した。少ししてスピーカーの奥から声が聞こえてきた。

「はい、どちら様ですか？」

綾だ。信司は安心したのか、胸をなで下ろし、スピーカーに声をかけた。

「綾、俺。暇だからやってきた」

「あ、信司君？ちょっと待ってて」

信司はドアの前で待つこと数分……

「いらつしゃい。さ、あがって」

綾は家の中ではとてもラフな格好だった。しかし、意中の信司がやってきたため、着替えたらしい。この年頃の女の子としては普通だ。

「んじゃ、おじゃまします」

綾の家はフランス風の家具でまとめられてあり、とても統一感がある。

「少し待っててね。紅茶入れるから」

「おう、ありがとな」

綾は平然と紅茶を入れていたが内心動揺していた。

（うわあああああ！！信司君来ちゃったよ！！もっと片付けてお

くべきだった……！！僕の馬鹿馬鹿！！！！）

綾は心の中でポカポカと自分の頭を叩いた。

「なあ……綾」

「な、何かな……？」

「唐突ですまない……」

「付き合ってくれ……！！」

「はあ……」

「ありがとな。買い物に付き合ってもらって」

綾はあの時告白されたかと思った。正直そっちの方が良かったが……。

「付き合ってくれ……！！」

「へ／／／／／／／／／／！！？」

「買い物に……！！」

以上。これを意中の人に言われては年頃の女の子はショックだ。信司は一方……。

（なんか、勢いで誘ったけど、緊張する……。周りから見たらこれ、デートに見えるしな……／／）

正直彼の方が動揺していた。

「ねえ信司君……」

「な、何だ？」

信司はドキッとした。今の彼は一触即発の爆弾に近い。

「喫茶店、行こ」

「あ、ああ」

綾は喫茶店に信司を誘った。内心はこうだ。

（こうなったら、僕が信司君をその気にしてあげる！！）

喫茶店に入った二人。そこはこの近所でとても評判の良い場所だ。
「僕はこれにしょ」

「俺は…、これ」

二人は店の人に注文をした。
待つこと数分…。

「お待たせしました」

店の人が注文した品物を運んできた。机におかれたのは英国式紅茶が二つ、チョコケーキとチーズケーキ。

「いただきます」

綾は自分が注文したチョコケーキをフォークで一口ほど口に入れる。

「美味しい…」

口の中にほどよい甘さと苦みが広がる。

「綾…。チョコケーキ好きなんだな」

「あ…変？」

「いや、そんなことないぜ」

「そ、そお？良かった。じゃあ…」

綾はフォークでチョコケーキを少し切り取り、信司に差し出す。

「食べる…？」

「ありがと。じゃあもうよ」

綾は信司の口にフォークをそっと入れる。信司の口にチョコケーキの味が広がる。

「美味しいな…」

「でしょ。これ美味しいよね。」

心の中ではっ、両者は思った。これって…。

（間接キス！？）

「な、なあ綾。俺のも食べるか／＼？」

「え、い、良いの？それじゃあもらおうかな…／＼／」

信司は自分のチーズケーキを女の子の口に丁度良いサイズに切り取り、綾の口に運んだ。

「美味しい…」

そんな甘いひとときを堪能した二人は割り勘で会計をすませ、店の近くのベンチに腰を掛けた。

「ねえ、一つ、良いかな？」

「ああ…、何／＼／？」

「僕は…／＼／」

そんな時間を引き裂く一つの爆音。それを聞いて信司は爆発の方向を振り向いた。

「何だあれは…」

そこにはもの凄い形相の怪物が立っていた。

「ごめん綾。行ってくる」

信司はカードデッキ片手にその方向へ走っていった。

「あ！待ってよ信司君！！」

信司はデッキを構えた。バックルが信司の腰に出現した。

「変身！！」

信司はデッキをバックルに装填して仮面ライダー龍騎に変身した。

「行くぜ顔面野郎！！！！」

その敵の顔はとても威圧感が強かった。

「このムシャファンガイアに立ち向かう勇氣があるとはな。だが！！」

ムシャファンガイアは腰の刀で龍騎を一閃した。しかし…。

『SWORD VENT』

龍騎はドラグセイバーで防いでいた。

「危なかった。間に合って良かった」

龍騎とムシャファンガイアの斬り合いは熾烈を極めた。両者は互角に見えた。しかし…。

「くそ…」

龍騎に疲れが見え始めた。立っているのがやっとだ。

「無理しないで信司君!!」

「綾!？」

綾は陰から見守っていた。ムシャファンガイアは綾に向かって刀を投げる。

「間に合え!!」

龍騎はカードを一枚走りながらドラグバイザーに装填した。

『MEDAL VENT』

ドラグメダル三枚を重ねて盾にした。攻撃は防げた。しかし…。

「ぐっ!!」

メダル三枚はかなり重く、龍騎の体力を大きく削った。

「もう無理だよ!!」

「そんな事…、あるかよ…」

龍騎は力を振り絞って立ち上がる。

「俺は、綾を…守るために…」

「生き残ってみせる!!」

「信司君…」

その時、デッキから一枚のカードが飛び出した。それを手に取る龍騎。

「これは…?」

そのカードは燃えていた。烈火の如く。

龍騎は左腕を構えた。ドラグバイザーは炎に包まれ、ドラグバイザーに变化した。開いている口にカードを装填した。

『SURVIVE』

龍騎の体は烈火に包まれ、龍騎サバイブへと強化変身が完了した。
「何!？」

龍騎サバイブは無言でドラグバイザーにカードを装填した。
『SWORD VENT』

ドラグバイザーの先に剣の刃が出現した。ムシャファンガ

イアは刀で斬りかかるが、龍騎サバイブは刀ごとムシャファンガイアを斬った。

「何だこの力は!!」

「これは…生き残るための力だ!!」

龍騎サバイブはカードを装填しながらそう叫んだ。

『FINAL VENT』

ドラグバイザーツバイの刃に炎が纏われる。それでファンガイアを一閃した。烈火に包まれファンガイアは爆発して散った。

「ふう、終わった」

龍騎への変身を解除し、綾の元へ歩み寄る信司。

「お疲れ様信司君。その…格好良かったよ」

その言葉で心がいやされる信司。

「あと…僕、信司君の事が…好き／／／／!!」

その言葉に思わず顔を赤くする信司。綾の顔も真っ赤になっている。

「綾、俺もお前が好きだ／／／」

その瞬間、互いの思いが通じ合った瞬間だった。

「ねえ、キスして／／／」

「ああ…／／／」

二人はそつと唇を重ねた。初夏の風が二人の想いを彩る…。

第10話「生き残るための力」(後書き)

恋って、良いですね…。次回は達也と志野が…。の予定です。

【次回予告】

「気持ちいいな…」

「俺は、破壊者じゃない！守護者だ！！」

『プロテイルノザウルス！！』

街を守れ、オーズ！！

第11話「破壊者から守護者へ」(前書き)

また恋が実ります。学校の講義が難しい…。

第11話「破壊者から守護者へ」

counts the medals 現在、オースの使えるメダルは…？

タカ×1 クジャク×1 バッタ×1 トラ×1 ゴリラ×1
シヤチ×1

ウナギ×1 タコ×2 プテラ×2 トリケラ×1 ティラノ×2

「むむむむむ…」

志野は一人机に向かって唸っていた。その理由とは…？

「描けない…」

美術の課題である風景画に取り組んでいた。下書きは完成したが着色が上手くいかない。

「うあーーーーーーーっ！！！」

ついに我慢が爆発した。その勢いで紙が破れた。それを見て啞然とする志野。

「……………」

「おい、志野。どうし…！？」

達也が部屋に入ってきた。その目に映った物は散乱する紙。

「もしかして…課題？」

こくつ、と志野が無言で頷く。

「色塗り？」

再びこくつ、と頷く。

「やけくそで破いてしまった？」

さらに頷く。

「いっしょに…街で何か書くか？」

「うむ！！！！」

「あれ、絵の方は…？」

「とつくに完成している」

「おお——」

場所は変わって京都の中心部。古都と言えど近代的だ。結構人でにぎわっている。

「落ち着かん…。人が多いのは学校だけで十分だ…」

「……／＼／」

達也は妙に落ち着いていなかった。何故かって？そりゃ…。

第三者から見たらまさしくデートだからである。

（意識してしまうな…。この間の法隆寺も…）

もう少してキスをするところだった。それを思い出して赤くなる達也。

「しかし、おまえは馬鹿だな」

「馬鹿っておい…」

優しく微笑む志野の表情で言葉が止まる。あのときと一緒だ。

「私なんかのために、あそこまで…。本当に、馬鹿な奴だ」

一呼吸置き、

「だがな、私はそんなお前が…」

その言葉は途中で遮られた。目の前から車道を走る車を吹っ飛ばして何かがやってきた。

「ひゃあ——っはあ！！！！最高最高！！！」

ファンガイアが爆走していた。見た目は…馬？いや…角があるから…。

「志野、任せろ」

達也はオーズドライバーを装着、コアメダルを三枚装填してスキヤンした。

「変身！！」

『タカ！トラ！バッタ！タトバ！タトバタトバ！！』

仮面ライダーオーズタトバコンボに変身が完了した。

「さてと、倒しますか」

爆走するユニコンファンガイアをキックで吹っ飛ばすオーズ。ビルに直撃し、がれきに埋もれるファンガイア。しかし…。

「うぐっ!!」

がれきの中から角が飛び出てオーズの右肩を貫いた。

「やるじゃねえか…いわゆるとつておき?こつちにも…あるぜ」

オーズの体内から紫のメダルが排出され、角を砕いた。それは自立的にドライバーに装填され、スキャンされた。

『プテラ!トリケラ!ティラノ!プトティラノザウルス!!』

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

プトティラコンボ。その咆哮はがれきを吹っ飛ばし、ファンガイアに強烈な威嚇を与えた。

「この俺の爆走をじゃまする奴は許さないぜえ…!!!!」

ファンガイアは角を剣状に変形させ、それでオーズを斬りつける。

「ウオオオオオオオオ!!」

オーズは地中からメダガブリューを取り出して応戦する。しかし、闇雲に振つても当たりはしない。「はっ!!楽勝楽勝!!」

いとも簡単にカウンターを受けるオーズ。

「達也あ!!」

志野が駆けつけて叫んだ。

「メダルごときに支配されるな!!私の、私の惚れたお前は、そこまで弱くは無かったぞ!!」

——そうだ。俺は、俺は…!!

志野を守る為、何にも負けない!!!

「はあっ!!」

オーズはメダガブリューを正確にファンガイアへ命中させた。

「達也…？」

志野の方を向き、こう言った。

「ありがとな。お陰様で打ち勝てた。待ってる、すぐに終わらせる」

「達也…！」

ファンガイアは剣を構えてオーズへ向かう。

『ガブガブガブゴッコン…！』

セルメダルをメダガブリューに装填し、口を閉じて再度開く。

『プティラーノヒツサーツ…！』

迫り来るファンガイアの懷に刃を食い込ませ、一気に力を解放する。

「うおおおおお…！」

ファンガイアはステンドグラスとなり、爆散した。

「疲れた…」

如月家のリビングでくつろぐ達也。

「達也」

「志野…／／」

志野は風呂上がりだった。石けんの香りが漂い、浴衣一枚のみの服装はドキドキする。

「今日は—」

「…！！」

達也の唇に志野の唇が重なる。

「あの続きだ。私はお前が好きだ」

ボツ、と顔が赤くなる達也。

「お。俺も好きだ…！」

二人の想いが通じた。顔を赤く染めながら、互いの部屋へと戻っていった。

第11話「破壊者から守護者へ」（後書き）

次回からはベルトさん作「仮面ライダーエターナル」風都を守る永遠の戦士」

の主役二人、上野進也君と松下里美ちゃんが準レギュラーで出演します。ベルトさんタイトル間違っていたらすいません。

【次回予告】

「上野進也です。」

「松下里美です。」

「二人もライダーなんだ。」

「いきますよ!!」

『エターナル!!』

『フィ・ス・ト・オ・ン!』

これで決まりだ!!

第12話「風に乗ってやって来た転校生」(前書き)

ついに進也君と里美ちゃんが登場します。ベルトさん、見てますかー？

第12話「風に乗ってやって来た転校生」

「志野、愛してる」

「ば、馬鹿者：／／／／」

「志野…」

「うわっ、ちょ、こんな所で…ひゃっ！！」

「夢か……」

志野は目が覚めた。夢でまさか達也にあんなことをされるとは。

「汗…かいたな。シャワーを浴びるか…」

志野は部屋を出てシャワールームへと足を運んだ。脱衣所で汗に濡れた浴衣を脱ぐ。

シャワーを浴びながら志野は思った。

（うっ、また大きく…）

志野は自分自身の年齢不相応に発達した胸を非常に気にしていた。

「しかし、達也が好きと言うなら…」

シャワールームを出て制服に着替え、リビングへ向かった。

「よっ、志野おはよう！」

「ああ…／／／」

どうしたんだ志野？様子が…。

ぼん。

「ひゃうっ！！」

志野が声をあげた理由は突然自分の額に手を当てられたからだ。

「…ははは！お前がまさかそんな声を…！！」

「ば、ば…」

「？」

「馬鹿者おおお！！！！」

志野が竹刀で達也を叩こうとした。しかし…。

「あれま…」

メダルが飛び出て竹刀を押さえていた。

「切り捨て…御免！！！！」

「ばしいん！！」

「いでええええええええええ！！！！」

メダルを強引に突破して達也の右足に竹刀は命中した。

京都鳳凰学園高等部は本日より衣替え。夏服が新しい。いつもと違った事があった。供託の方に見知らぬ男女生徒がいたからだ。

「今日は、転校生を紹介します。風都からやってきた上野進也君と松下里美さんです」

「上野進也です。みなさん、これから宜しくお願いします」

キアアアアアアアアアア！！！！女子全員（志野と綾以外）が黄色い声をあげた。それもそのはず。だってかつこいいから。

「おい五月蠅いぞ」

ピタッ。

信司の一声で止まった声。ああ…素直だな。

「松下里美です。宜しくお願いします」

可愛い可愛い可愛い可愛い！！！！今度は男子（達也、信司以外）が声を出した。まあ、可愛いけどな…。

「みんな静かにして！」

綾の一声で止まった。こいつら…。

「君達が転校生？よろしく。俺は神代達也。よろしく」

「私は如月志野だ。これからよろしく頼む」

「俺は龍川信司！よろしく！」

「僕は篠原綾。よろしくね」

いつもの四人が自己紹介をした。

「改めて、俺は上野進也。よろしく、ライダーさん達」

「……!?」

三人（達也、志野、信司）は驚いた。ライダーであることを見抜いているからだ。

「君達のこととはここに来る前にとある知人から聞いたんだ。俺もライダーなんだ」

「あの…上野君…」

「あ、ごめん松下さん」

「松下里美です。これから宜しくお願いしますね。私もちなみにライダーです」

一通り自己紹介を終え、俺たちは授業に臨んだ。

「はあ…数学難しい…」

「あれ位簡単だ。出来なくてどうする」

難しいのは難しい。二次関数とか因数分解とか…、訳分からん!!

「志野…また教えてくれ」

「仕方ないな。特別に教えてやろう」

そんな話を俺たちは食堂で進也と里美が住んでいた風都名物「風都ラーメン」を食べながらしていた。なるとがめちやくちや大きい。でも美味しい。

「いつか二人のお手並みを拝見したいな」

「ははっ、いつかな」

進也のライダーはエターナル。ガイアメモリと呼ばれる装置を使って変身するらしい。里美のライダーはイクサ。キバと同じフエッスルを使うらしい。

「にしても美味しいなこのラーメン」

「だろ!! 風都ラーメンは最高だ! 自慢できるぜ!」

（上野君、テンション高いですね…。ラーメンを褒められて嬉しいのでしょう）

そんなことを考えながら里美はラーメンのスープを啜った。

「さあて、帰り…」「ばごぉん!!」「…」

爆発音が聞こえた。校庭からだ。

「おい、あれ…」

達也が入学したときと同じように何かが飛来した。

「ミツケタゾ、ウエノシンヤ…ソシテ、マツシタサトミ…」

「おいおい、こんな所まで来るのかよ。つたく、こんな事になるならあんな道通るんじゃないかったよ」

「道？」

「ああ、ここに来る途中で石で出来た菩薩像を壊したんだ」

「あれは祟りつて事が…」

京都なら道ばたに菩薩像があってもおかしくないな。

「松下さん、行くよ」

「はい、上野君」

進也はロストドライバーと呼ばれるベルトを装着した。制服の内ポケットからガイアメモリを取り出してスイッチを押した。

『エターナル!』

「変身!」

ガイアメモリをドライバーに装填し、展開した。

『エターナル!』

進也の体はエネルギーに包まれて仮面ライダーエターナルに変身した。

「さあ、お前に罰を与えよう!」

里美はイクサナツクルを左手の平に当てた。

『レ・ディ』

待機音が鳴り響く。

「変身」

事前に装着したベルトにイクサナツクルをセットした。

『フィ・ス・ト・オ・ン』

里美の体をシルエツトが通過して仮面ライダーイクサバーストモードへ変身が完了した。

「その命、神様に返して下さい！」

エターナルはエターナルエッジ、イクサはイクサカリバーを右手に持って崇りの具現化した敵（以後崇りと表記）に斬りかかった。

「タタリジャア！」

崇りは波動を放つ。しかし、効果はなく、斬撃を喰らう。

「面倒だからさっさと決める！」

エターナルはガイアメモリを取り出してベルトのドライバーに装填した。

『バイオレンス！マキシマムドライブ！』

「暴力の記憶」を持つバイオレンスメモリを装填した。エターナルの右腕が徐々に大きくなる。

「松下さん、足止めお願い！」

「分かりました！」

イクサはイクサカリバーに付けられている銃口を崇りに向け、引き金を引く。放たれた銃弾は崇りに命中。崇りはイクサの方を向く。

「バイオレンス・ナツクル！！」

バイオレンスメモリの力を纏った右腕は崇りを地面に叩き伏せた。

「タ…タリ…！」

崇りは成仏した。

「お見事…」

【電車内】

「この街にいるのか…」

そうつぶやいた若者は黒のジャケットを着こなしていた。

「勝つのは俺だ」

その手にはカードデッキが握られていた。

第12話「風に乗ってやって来た転校生」(後書き)

これから二人は準レギュラーで登場します。次回から新シリーズ
!!ここぞご期待

【次回予告】

「俺は黒羽蓮^{くろばれん}。おまえと同じライダーだ」

「願い…?」

『FINAL VENT』

戦わなければ生き残れない!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3169y/>

仮面ライダーオース 街を守る王の戦士

2011年12月2日17時58分発行